
バンベルク大聖堂の《騎馬像》と《聖母像》
－『雅歌』の伝統と聖堂彫刻のイメージ・プログラム－

バンベルク大聖堂の《騎馬像》（1227-29年頃）と《聖母像》（1230年頃）は、ハンス・ヤンツェンも指摘しているように、ドイツ中世彫刻の傑作である。13世紀の同聖堂再建時に制作され、後援者は神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ2世とみられている。

両像は、同聖堂の聖ゲオルギウス内陣北側障壁上の彫刻群に属し、丸彫りの独立像の特徴を備えている。また、制作した工房の作風には、ドイツ語圏での早期の例として、フランス・ゴシックの影響が確認されている。このような彫刻群をめぐって、先行研究では様々な解釈が試みられ、また近年、13世紀当時の建築や色彩の科学調査により、新たな発見があったが、主題については未だ解明されていない。

本発表では、これらの彫像群は一連のイメージ・プログラムを形成し、その中心的主題が旧約聖書の『雅歌』に由来するという新たな観点から、《騎馬像》と《聖母像》を「花嫁神秘主義における花婿と花嫁」として、明らかにすることを試みる。『雅歌』註解の伝統において、最も影響力のあったアレクサンドリアのオリゲネスは、神もしくはキリストを「騎馬像の騎士」としての花婿、そして、聖母または教会、個々の魂をその花嫁と解釈し、その註解書も同聖堂旧付属学校に現存する。また、ユリの紋様、台座、背景の彩色、特異な表情などの個々の特徴、天蓋や花冠のモチーフの共通性や衣襲の流れの方向性なども、両像の結びつきを強く示唆している。

こうしたイメージ・プログラムを、ゴシック美術に特有である、観者の身体を組み入れた視線の導きをもとに分析する。主要扉口である聖堂北西部「君侯の門」から入堂する特別な階級の観者には、《騎馬像》と《聖母像》が対として強調され、聖堂東部「恵みの門」と「アダムの門」から入堂する一般信徒には、《聖母像》が「花嫁の母」としての《聖アンナ像》と《冠を掲げる天使像》に伴うことによって、『雅歌』註解を母体とする「聖母戴冠」として鑑賞されたとみる。

バンベルクで『雅歌』に関心が寄せられたことは、『雅歌』の夫婦像が表紙に描かれた『バンベルク詩篇』（13世紀初頭）を始めとする、当時の関連史料によっても示される。同聖堂における聖母と乙女、聖アンナの礼拝や「聖母被昇天」の祝祭、フリードリヒ2世の宮廷サークルにおける古代への傾倒や科学と芸術が融合した思想や文学、そして急速に広まる「女性の霊性」も、その萌芽において『雅歌』が本質的な契機となっている。

様式的模範となった、フランス・ゴシックのシャルトルや当時ドイツ語圏にあったストラスブールの大聖堂彫刻群、さらには同聖堂に縁の深い、バンベルクの聖オットーが委託した修道院天井画においても、『雅歌』は中心的な主題であった。《騎馬像》と《聖母像》は、ドイツ・ゴシック、およびシュタウフェン朝美術の背景としての『雅歌』の役割を浮かび上がらせる一例となり得るだろう。